

新進芸術家海外研修制度
研修結果報告書

研修開始年度 | 令和 4 (2022) 年度

分野 | 美術 (現代美術)

研修先 | ノルウェー (オスロ)

研修期間 | 1 年

氏名 | 是恒 さくら

1. 研修目的（課題）

芸術活動と人類学的な研究活動の結合により、異なる国や文化に生きる人々の間にお互いの文化への理解をもたらす表現の可能性を探るため、オスロ大学文化研究・東洋言語学科の研究プロジェクトに客員研究員として参加する。「鯨」を共通のテーマとして、ノルウェー国内でのフィールドワークと、オスロ大学の研究者らと情報交換を行う。その知見をもとに紀行文を執筆、小冊子として発行するとともに、テキスタイル作品、アニメーション・映像作品を滞在制作し、展覧会を開催する。

2. 研修日程

研修先：オスロ大学文化研究・東洋言語学科

所在地：ノルウェー（オスロ）

指導者：アイケ・P・ロッツ（オスロ大学文化研究・東洋言語学科 准教授）

研修期間：令和4(2022)年10月4日～令和5(2023)年9月12日

3. 研修内容、成果

A) 研修課題の題目

【課題①】ノルウェー国内でのフィールドワーク

【研修内容・方法①】

フィールドワークの準備段階で研修先のオスロ大学・大学図書館で文献調査と資料収集を行うとともに、研修指導者のロッツ氏が率いる研究プロジェクト「Whales of Power」に所属する研究者や関連する分野の研究者から情報提供を受けた。オスロ市と近郊の博物館・美術館を訪問し、捕鯨と漁業、鯨類にまつわる研究や表現がどのように紹介されているか、また、捕鯨への認識が近年どのように変化しつつあるかということへの知見を深めた。

フィールドワークでは、人が鯨に抱くイメージと資源としての鯨類のありようの変遷について理解を深めることを目指した。ノルウェーで発見されている最古の鯨類の表現を知るため、数千年前に狩猟・漁撈生活を送っていた人々によって彫られた岩刻画の実地見学を行った。こうした岩刻画の多くは海岸沿いの森の中などに存在する。鯨類を表した岩刻画が見られるソプスタッド（アヴェロイ、ムーレ・オ・ロムスダール郡）とレイクネス（ハーマレイ地域）を訪れ、岩刻画の実物とともに周辺環境を観察した。ノルウェーの捕鯨史と鯨類研究の歴史を知るため、ベルゲン、サンデフィヨルド、トンスベル、バツェ、メハムン、ショレフィヨルド各地を訪れた。また、現代の鯨類と人の関わりを知るため、ホエール・ウォッチング事業が複数の団体によって行われているトロムソを訪れた。各地で博物館や資料館の見学、鯨類の観察と生態についてのレクチャー聴講、捕鯨に携わる人々やその家族への聞き取りを行った。

鯨を手がかりにノルウェー国内各地を訪れる中で、ハーマレイ地域のトラノイというコミュニティに焦点を当てフィールドワークを計画・実施した。2023年5月の1ヶ月間トラノイ滞在し、現在の鯨肉

食への意識や対岸のロフォーテン諸島で現在も行われている捕鯨業について聞き取りや資料収集を行なった。また、滞在中はこの地域のギャラリーの協力を得てドローイング・テキスタイル・アニメーションなどの作品制作も行い、フィールドワークによる調査研究と作品制作を組み合わせることを目指した。

【課題②】 オスロ大学の研究者らとの情報交換

【研修内容・方法②】

オスロ大学では研修指導者のロッツ氏が率いる研究プロジェクト「Whales of Power」の企画として公開セミナーを開催し、これまでの自身の活動とノルウェーでの研修計画を発表した。私のセミナーに参加した研究者や一般参加者と意見交換を行なった。また、大学内で開催された研究会・セミナーへ積極的に参加しながら、関連する分野の研究者や大学に関わる博物館・図書館の担当者とのネットワークを築いた。

【課題③】 紀行文の執筆と小冊子の発行

【研修内容・方法③】

ノルウェー国内各地でフィールドワークを行い集めた捕鯨や漁業に関する体験談や伝承などをドローイングとともにまとめた。体験談や伝承の記録は英語で執筆した。

1ヶ月間のフィールドワークを行なったハーマレイ地域トラノイのギャラリーの協力を得て、毎年夏期間に開催される展覧会にてドローイングと小冊子をあわせて紹介した。

【課題④】 テキスタイル作品及びアニメーション・映像作品の滞在制作、展覧会の開催

【研修内容・方法④】

オスロ大学の研究者や管轄する施設との協働と、フィールドワークの実施により、以下の3つの企画に向けて作品制作を行なった。

- i. オスロ大学図書館展示スペース／研究プロジェクト「Whales of Power」との協働展示（テキスタイル作品、ドローイング、写真）
- ii. ハムスンギャラリー・トラノイ／夏季展示（テキスタイル作品、ドローイング、小冊子）
- iii. オスロ大学管轄の歴史文化博物館／特別展「Control - Attempting to Tame the World」への介入としての公開制作（魚皮と海藻の立体作品、アニメーション、映像）

B) 研修の成果

大幅に達成できた

【課題①】 ノルウェー国内でのフィールドワーク

フィールドワークでは、人が鯨に抱くイメージと、資源としての鯨類のありようの変遷について理解を

深めることを目指した。ノルウェーと日本の捕鯨史の関わりに着目し、主要テーマとした。19世紀後半のノルウェーで捕鯨砲と蒸気船を使う新たな捕鯨方式が発明された後、その技術は「ノルウェー式捕鯨」としてロシア、日本へと導入された。それまで日本国内では限られた地域で鯨組による古式捕鯨が行われていた。ノルウェー式捕鯨への転換は、技術的にも地域の生業としても大きな変化をもたらし、それに伴い人々が鯨に抱くイメージも変化していったと考えられる。ノルウェーの捕鯨史と日本との関わりへの理解を深めることは、日本の現在の鯨への観方を捉え直していくことにつながるだろう。日本の研究者らによる先行研究、日本の博物館等との情報交換により、ノルウェーと日本の捕鯨の関わりと影響を現在も残る信仰や民芸品・工芸品に見出すことができた。また、かつて日本に赴いたノルウェー人捕鯨船長や砲手の子孫の方々への聞き取りや資料の照会を行い、現代のノルウェーで過去の捕鯨による日本との関わりと歴史がどのように残され、認識されているかを探った。

ノルウェー国内でのフィールドワークでは、捕鯨史と捕鯨の関わりについて、地域によって異なる歴史を歩んできたことへの理解を深めた。資料の閲覧や大学・博物館の研究者との情報交換により、ノルウェー式捕鯨が各地で操業され始めた最初期にノルウェー北部のフィンマルク県では地元の漁業者からの反発があったことを知った。その背景には「鯨はシシャモやタラをもたすから捕鯨に賛成できない」という漁業者独自の考え方があった。フィンマルク県には捕鯨事業所があったが、漁業者の反発と捕鯨事業者との諍いをきっかけとして操業停止となった。よく似た事件が日本の青森県八戸市で起きており、日本を研究対象とする研究者によって比較されている（1911年の「東洋捕鯨鯨事業所焼討事件」）。八戸を含む三陸沿岸部と北海道の漁業者の間で鯨は「ニシンやイワシを連れてくる存在、『エビス』」として信仰されていることもあり、漁場を汚染し漁業に影響を与える捕鯨と対立したのだった。異なる海を生業の場とするノルウェーと日本の漁業者が鯨に対してよく似た知識・考え方を持っていたことは、地域の自然環境に根ざしたものの見方から、異なる土地を結びつけていく物語を探る大きな手がかりとなった。また、現代の都市部と沿岸の小さな自治体では鯨食への考え方が異なること、世代により鯨食への馴染み方が異なるなど、価値観の変化が起きていることが聞き取りによってわかった。フィールドワークを通して人と出会い話を聞きながら実感を持って理解を深めた。

【課題②】 オスロ大学の研究者らとの情報交換

研究者らとの情報交換により、フィールドワークの準備を十分に行えた。また、オスロ大学図書館、オスロ大学管轄の歴史文化博物館での展示企画が実現した。

【課題③】 紀行文の執筆と小冊子の発行

ハーマレイ地域トラノイでのフィールドワークと滞在制作を経て開催した展示にて、ノルウェー各地の鯨・捕鯨・漁業にまつわる伝承や体験談を集めた小冊子をドロワーイングとともに発表した。この小冊子には多くの関心が集まった。地元トラノイの住民の中には、私の小冊子を読んだことをきっかけに触発され、自分の体験談を語ってくれた方もいた。さらに、私が英語で書いた文章をノルウェー語に訳してくれ

る方が現れ、ギャラリーでの展示会期の途中からは、英語・ノルウェー語両方の小冊子が揃うこととなった。フィールドワークと制作、展示という異なる活動を結びつけていくことで、それぞれの活動の深度が増していくこと、相乗効果をもたらされることを実感した。

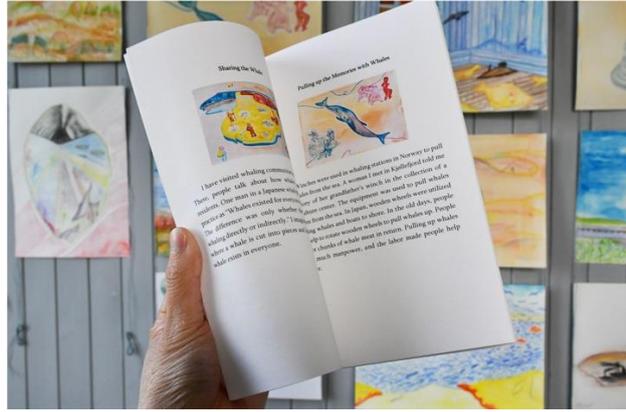
【課題④】 テキスタイル作品及びアニメーション・映像作品の滞在制作、展覧会の開催

「i. オスロ大学図書館展示スペース／研究プロジェクト「Whales of Power」との協働展示」では、フィールドワークと資料調査を通して調べてきたノルウェーと日本の捕鯨史の関わりをテーマとした。ノルウェー人捕鯨船船長・砲手の子孫の手元に残る写真資料や思い出話、日本に今なお残るノルウェーの捕鯨技術導入の名残をモチーフとして刺繍した大型のテキスタイル作品をこの展示のために制作した。

「ii. ハムスンギャラリー・トラノイ／夏季展示」では、1ヶ月間の滞在制作を行い、ノルウェー各地の鯨・捕鯨・漁業にまつわる体験談や伝承をテーマに約30枚のドローイングを制作し、個別のエピソードとともにまとめた小冊子を制作した。また、刺繍のテキスタイル作品を制作・発表した。ギャラリー内での展示に加えて、海辺の岩場に防水加工した絵を展示し、白夜のノルウェーの夏の自然とともに芸術作品を鑑賞する場と時間を作り出した。「iii. オスロ大学管轄の歴史文化博物館／特別展「Control - Attempting to Tame the World」への介入としての公開制作」では、特別展への芸術による介入として公開制作を行なった。協働した特別展は、人と他種の生物の関わりをテーマとし、家畜の歴史に焦点を当てている。私の制作では、ハーマレイ地域トラノイでの滞在制作で制作した魚皮と海藻の立体作品と、それらを使ったアニメーション、そして博物館のポスト・ドクトラル・フェローによる私の紹介映像インタビューを発表した。同博物館に所蔵されている日本資料のうち「海の怪物（人魚のミイラ）」とされるものを特別公開し、日本列島で培われていた海に関わる信仰、他生物や他種の関わりを公開制作作品のテーマとした。アーティストの解釈を博物館展示に融合させていく取り組みが、様々な分野の視点を自分なりに解釈するきっかけを与える機会となった。



i. オスロ大学図書館展示スペース／研究プロジェクト「Whales of Power」との協働展示の様子



ii. ハムスンギャラリー・トラノイ／夏季展示の様子と制作した小冊子



iii. オスロ大学管轄の歴史文化博物館／特別展「Control - Attempting to Tame the World」への介入としての公開制作にて発表したアニメーションのステル

C) 研修成果の活用計画

本研修では、人が鯨に抱くイメージと資源としての鯨類のありようの変遷について理解を深めること、探究の成果を作品制作や展覧会開催として形にしていくことを目指した。ノルウェーで一年間調査と制作・発表を行い、今後も継続して取り組みたいテーマとして、〈ノルウェーから日本への捕鯨技術の導入／近代化と、それに伴う人々と鯨との関わりの変化〉がある。20世紀初頭にノルウェーから日本へ「ノルウェー式捕鯨」が導入された。それまで日本国内では古式捕鯨である網取り式捕鯨が主だった。捕鯨砲と蒸気船を用いるノルウェー式捕鯨の発明は捕鯨技術に大きな進歩をもたらした。この時代、日本国内で網取り式捕鯨を伝統としてきた各地の担い手たちも新たな捕鯨産業の労働力となっていった。生活と文化の礎であった鯨は、資本主義経済の始まりとともに各国が捕獲を競う資源へと移り変わっていった。鯨との関わりとともに人々の自然観が大きく変化したこの時代の記憶をノルウェーと日本に残る記録や物質文化に見出していききたい。

今ではあまり顧みられることのない、ノルウェーに残る資料と日本に残る資料を重ね合わせていくことで、経糸と緯糸を交わらせていくように、鯨にまつわる人々の記憶を織りなしていくことができるのではないかと考えている。本研修では、かつて日本に赴いたノルウェー人の捕鯨船船長・砲手によって撮影

されたガラスネガや、その子孫の手元に残された日本からの土産物や贈り物について、調査と聞き取りを行った。また、日本国内の博物館等と情報交換をする中で、20世紀初頭のノルウェー式捕鯨導入時期に奉納された絵馬や捕鯨砲などが見つかった。ノルウェー人の捕鯨船関係者が作っていたクジラヒゲや鯨の歯を素材とする工芸品と、日本の捕鯨船関係者が作る同様の素材の工芸品にはとてもよく似たものも見られる。さらに、日本で作られたクジラヒゲの工芸品がノルウェーの捕鯨に関する博物館に収蔵されていることも明らかとなった。ノルウェー式捕鯨の導入は、技術的な面だけでなく、捕鯨とともにある人々の生活の中の工芸という彩り、信仰の形にも影響をもたらしてきたことがわかる。二つの国の間での調査研究を織物になぞらえて考えながら、テキスタイル作品として制作を続けていきたい。

各国で歴史の見直しが進む中で、過去にノルウェー人が他国にもたらした影響への関心も高まっている。その際、捕鯨は大きなテーマとなる。ノルウェーからの捕鯨技術導入を通じたノルウェー人との関わりが日本にどのような影響をもたらしてきたかを知ること、現在も残る影響を知ることが、二つの国の歴史の関わりを見直す大きな手掛かりとなるだろう。20世紀初頭に日本の捕鯨に携わったノルウェー人捕鯨船船長、砲手、船員の様子は日本やアメリカなど複数の国の小説家や探検家、個人の随筆にも書かれている

ことは興味深い。しかし、日本語で書かれた内容についてノルウェーでは知られていないものがほとんどだ。こうした文章の中で、特に日本人小説家が執筆した探検記は、実際に捕鯨船に乗船しながらノルウェー人の捕鯨船船長、砲手、船員の日々の様子や人間関係、故郷への思いなどを詳細に書き記している。今後はこうしたエッセイや探検記、あるいは小説を翻訳し、本研修を通して活動を共にしたノルウェーの研究者、博物館関係者、捕鯨関係者の子孫の方々との情報交換を進めていきたいと考えている。ノルウェー人捕鯨船船長、砲手、船員らと交流のあった日本人が記した文章は、ノルウェー国内で知られていることとは異なる彼らの姿を伝えるだろう。ノルウェーと日本の間の往復書簡のように、情報交換を続け、その過程を文章などで記録して行きたい。また、ノルウェーに残る写真資料と日本に残る文書資料を重ね合わせながら浮かび上がるモチーフを刺繍や映像作品に用いた制作を継続する。そして、これらの活動の総括としてノルウェーと日本の両方での展覧会の開催と多言語（日本語、ノルウェー語、英語）書物としての発行を目指したい。その際は、博物館や図書館、アーカイブと協力しながら、ノルウェー・日本双方に残る資料の紹介も実現したいと考えている。

D) 研修国の情報

本研修中に行った展示のうち二つの企画は、オスロ大学の大学図書館とオスロ大学管轄の歴史文化博物館にて開催された。どちらの企画においても学術研究や博物館展示との協働が重視された。芸術作品が、研究や博物館資料に新たな解釈や視点をもたらすものとして受け入れられていることを感じた。芸術／アートと研究／リサーチの融合や複合領域にわたる活動が昨今の潮流となっている。また、ノルウェーには「パーセント・フォー・アート」という規定があり、行政の建造物はその設置費用の0.5~1.5パーセントを芸術作品のために使うという。そのため、公共図書館や大学施設内にも芸術作品が多数ある。公

の場所で文化芸術に触れることが当たり前のこととして受け入れられているのだと感じる。
本研修中に展示を行ったオスロ大学大学図書館、歴史文化博物館ともに展示や広報に携わる専門のスタッフがいて協働してくれたことが印象に残っている。彼ら・彼女らは展示を企画する研究者をサポートしながら専門性を活かした提案や企画立案も行ってくれた。展示・広報に関わるスタッフが専属で仕事をしていることは、企画をスムーズに進めてくれた。